正義を食べチャイナ

王 柳蘭
京都大学白眉センター特定准教授、地域研究統合情報センター

1．食文化と宗教―移民ムスリムから考えてみる

本発表ではタイに住む中国系ムスリムの食をめぐる規範を、宗教と多民族状況のなかで考えてみたいと思います。

まず自己紹介も兼ねて、研究関心の背景を説明いたしますと、私自身は神戸市に生まれた3世で、父が台湾人で、母は日本人、夫は、中国大陸出身です。父方の祖父母が神戸に移民してきたので、多くの文化が入り交じった生活をしてきました。例えば食文化を見てみると、日本的な暦を実践しつつ、日本のおせち料理も食べますし、季節に応じて、台湾の旧暦に従った食文化も育んできました。冬はダイコンの季節なので、ダイコン餅を食べたり、4月には生春巻きを自分で作ったりして、行事に沿って様々な食べ物を楽しみます。今回、食文化から価値観と民族の関係性を考えるにあたって、こうした自分のバックグラウンドからヒントを得ながら、多文化に囲まれたタイに住む中国系ムスリムの人々の食生活を考えたいと思います。

中国において、イスラームを信仰する回族は、少数民族のうちの一つですが、少数といっても、中国社会を構成する民族としては3番目に大きい民族と言われています。人口は約980万人いまして、外見は非常に漢族に似ており、言語も地域によって方言がありますが漢語を話します。そのうち、雲南省には約64万人いまして、スンナ派です。その中にもさまざまな教派がありますが、多くは老教（ラオチャオ）と呼ばれる、唐や元の時代に伝わってきたイスラームの信仰であるカディーム派に属しています。現在はそれに加えて、17、18世紀に入ってきた新しい宗派などを合わせて、4つくらいの宗派に分かれていますが、北タイにいる雲南系ムスリムのほとんどは、カディーム派に入ります。

中国の雲南からタイにやって来た後、彼らの暮らしは大変でした。なにしろ、故郷を逃げてタイに逃げ込んできたわけですから。周知のように、1949年に起こった中国の政変で、蒋介石と共に多くの人々が台湾に逃れました。ただし、内陸部では陸路で中国からミャンマーに逃げこみ、その後さらに南下してタイに再移住しました。その結果、中国が1980年代に実質的に国境を開放するまでは、タイに住む雲南系ムスリムの移民たちは、自らの故郷とは断絶した生活―例えば家族離散という状況などを余儀なくされてきました。そうしたつらい経験の中で、故郷のことをいつも思っている人が多くいるわけです。私が調査したインフォーマントのおばあさんもそうした一人でしたが、それと同時に中国の故郷、雲南省の人間であるという、自らの出自や文化に対する意識が非常に強いのです。

しかしその一方で、タイという多民族状況のなかで、彼らの故郷とは違った宗教的な実践や食文化も取り入れてきました。食文化を通して、どのような信仰を守り、さらにどのように他民族と繋がりをもっているのでしょうか。移民の食文化へのこだわりやそれを支える宗教規範を多民族状況の中で考えて、その実践のもつ意味を探ってみたいのです。

2．多民族状況の北タイ

2-1. 宗教的民族的布置

彼らはタイに移住して、しばらく山村に集住していたのですが、その後、しだいにビジネスチャンスや子どもの教育のため都市に引っ越しました。ここでは、チェンマイという都市に住む雲南系ムスリムがおかれている民族状況をまず説明します。そして、そのなかでどのような食文化が継承されているのか、あるいは多文化と混在しているのか紹介してみます。

まずはタイにおける宗教的分布をみてみます。2000年のセンサスですが、仏教が94.57％、イスラームは4.64％、キリスト教が0.72％、ヒンドゥー教が0.17％です。タイの人口が日本の約半分の6,593万人（2010年センサス）ですから、タイのムスリム人口は、約280万人（2000年）といわれています。

歴史的社会的特色によって、タイに住むムスリムは異なる生存戦略とコミュニティを築きあげてきました。ムスリム人口の約4分の3が南部に集中しおり、マレー系ムスリムです。また、バンコクにはペルシア系のモスクで17世紀のアユタヤ朝に建てられたトンソーンモスクもあります。

タイ北部（17県）をみますと、仏教徒95.51%、イスラーム1.53%、キリスト教2.49%、ヒンドゥー教やその他が0.47%です。このうち、北タイでは、中国から来た雲南系ムスリムと、南アジア系ムスリムがもっとも大きな勢力となっています。タイ社会では、雲南系を「ホー」、南アジア系を「ケーク」と呼んでいます。

雲南系ムスリムについてすぐわかるのは、「清真寺」（モスクという意味）という漢字がモスクに刻まれていることです。タイにあるモスクのなかで、唯一漢字がタイ語やアラビア語とともに併用されているのが特色です。ただし雲南系ムスリムの女性たちについては、必ずしもみな中国から来ている人ではなく、結婚することによってムスリムになった人たちも含まれています。ある女性は広東系の華人の末裔であったり、ミャンマー人と北タイ人の混血であったりします。中国雲南ではなくミャンマーで生まれた雲南系ムスリムもいます。女性たちは非常に複雑なバックグラウンドを持ってタイで雲南系ムスリムの妻として暮らしているのです。移民一世はかつてアヘン交易に従事していましたが、政府の禁止もありその後にハラール料理店や茶に生業を転換しました。彼らの言語は、一世は中国語（雲南方言）、2世以後は中国語とタイ語、3世以後はタイ語を母語にする傾向があります。

「ケーク」の場合、その出自は多様で19世紀後半に英領インドから商人としてタイに来た人までさかのぼることができます。パキスタン、バングラデシュの出身者です。第2次世界大戦後のインドからパキスタンが分離した時期にビルマ経由で入ってきた人も多いです。出自も多様ですが、職業的な特色として牛、ヤギ、羊、水牛などの精肉業、布商人に典型にみられます。チェンマイで市場に行くと、南アジア系の人たちが牛をさばいて売っているのをよく見かけます。南アジア系ムスリムは雲南系ムスリムがイスラーム的な食生活、ハラールにもとづく食文化の環境をまもっていくうえでは、肉を提供してくれる不可欠な存在なのです。彼らはタイに根付いた移民であり、言語はタイ語が母語になっています。

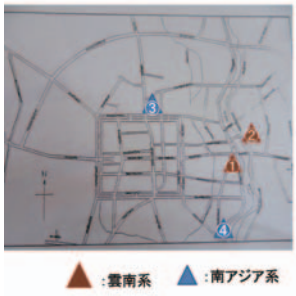
その他、北タイに住むムスリムには、ミャンマー系がいます。「（コン）パーマー」と呼ばれる人たちです。たとえば、北タイのメーサイや西側にあるメーソートというところです。彼らはそこから国境を越えて、タイ側にコミュニティを作っています。それらは草葺屋根のモスクであったり、一見すると彼らの多くは貧しく、南アジア系ムスリムのコミュニティに紛れ込んで、不法移民として暮らしている人もいます。彼らはタイ語が話せない人もいて、ビルマ語を母語としています。

2-2. モスクの分布

つぎに雲南系ムスリムがどのような地理的環境に暮らしているのかについて、モスクの分布状況からみてみましょう。チェンマイ県のチェンマイ市内には現在4つのモスクがあります。それらは、雲南系ムスリムと南アジア系ムスリムによって建てられたものです。

例えば、アメリカでは、移民のムスリムコミュニティは民族を問わずモスクを共有しているケースとモスクを共有していないケースがあるのですが、北タイにおいては民族別にモスクを作っています。

図1はチェンマイ市内に建てられた4つのモスクの位置を示しています。チェンマイ市には古い城壁があって旧市街は四方を壁に囲まれています。かつて城壁内には移民が住めないということがあり、この城壁の外周りに初期のムスリム移民商人たちからコミュニティをつくりました。現在チェンマイ市には4つのモスクがあります。それぞれ①番から④番まで番号をふっています。最も古いのは④番のチャンクラーン・モスクで1870年に南アジア系のムスリムによって建てられました。その次に古いのが③番のチャンプァクで1877年に南アジア系と雲南系が一緒に建てたモスクです。このように初期のころに一緒に2つのグループは共同でモスクを運営していた時期もあったのですが、しだいに分化してきまして、雲南系の人は1917年に①番のバーン・ホー・モスクを自分たちだけで



チェンマイ市内

民族別	モスク名	設立年
1 雲南	バーン・ホー	1917 (1966年建)
2 雲南	サンパコイ	1970
3 南アジア	チャンプァク	1877
4 南アジア	チャンクラーン	1870

図1

建てました。さらにコミュニティが大きくなり、あとから来た雲南系ムスリム難民、つまり1949年以降に北タイに入って来た難民を収容し切れなくなってきたので、②番のところに新しく土地を買って、サンパコイモスクを建てました。

こうした移住のプロセスによって、モスクは民族別に分化しきました。その結果何が影響してきたかというと、日々の礼拝のみならず、ジュマと言われる金曜日の集合礼拝（キリスト教は日曜日ですけども）は、それぞれの民族のモスクに分かれて礼拝をするようになり、その結果、民族どうし暮らしのなかで相互接触する機会があまり頻繁ではなくなったのです。最寄りのモスクで礼拝をするという発想ではなく、「自分の（民族の）」モスクに行く傾向が強いのです。バイクや車を使ってでも、自分たちのモスクで礼拝をするということです。また、子どものレベルでは、モスクは週末の土日に宗教学校を半日実施しますが、南アジア系の人は南アジア系のモスクでイスラームを学び、雲南系ムスリムの人もおなじく自分たちのモスクに通います。その原因は民族というレベルや使用言語の違いという壁があると思います。このように、日々の暮らしのなかで、同じムスリムといっても民族や言語の垣根を越えた交流は思った以上にはそれほど濃厚ではありません。限られたレベルの交流、たとえば、イマームなどの宗教指導者やイスラームの学校は政府の傘下にある宗教機関の会議や委員などの役割分担を通じて、相互にネットワークとして築かれているのですが、信徒間のレベルでは民族を超えたフェーストゥフェースで交わる機会はそれほど頻繁ではありません。

3. ハラールの実践と信仰

3-1. ハラール食品と伝統

そうしたなかで今回はハラールの実践、特に異なる民族的背景を持っている人たちが食べることを通してどのような実践と相互接触があるかということと、その意味を考えてみたいと思います。

ハラールとその対になるハラームの意味をまずみてみましょう。イスラーム法では人間の全行為を5つの規範的なカテゴリーに分けていて、義務、推奨、禁止、禁忌、許容があります。ハラームはそのなかで「禁止される行為」を指します。禁止行為は、神が人間に実行しないように命じている行為のことです。そのハラームの対になるのがここでとりあげるハラールです。ハラールとは「許容されたもの」を意味します。

ムスリムにとって大事なのは神とその終末を信じる、来世を信じるということです。そのハラールを実践するということは単に食べるだけではなく、究極のところは神と終末、特に来世で天国に行くという強い希望と神への信仰が入っているので、ハラームではない食べ物を慎み、ハラールとなる行為を行うようにするというのが基本にあります。

ハラール食品とはイスラーム的に合法な食品であり、イスラーム法の原則にそった食べ物が許容されるということです。ご存知のように豚肉や動物の血を食べることは禁止されています。豚肉以外の動物は「ビスミッラーヒ、アッラーフ、アクバル（神の御名によって、神は偉大なり）」という言葉を唱え頚動脈をきって屠殺し、体内の血液を流して処理したものであれば「許容されたもの」すなわちハラール食品になります。

中国ではハラール食品は、清真食品といわれます。そこにはピュアで清潔なといった意味も含んだ解釈がされているケースがあります。ここからハラールの実践を解釈するときにイスラーム法にそった行為とその先にある終末を信じるといった教条的な意味のみならず、食べ物については暮らしのなかで人々が意味を柔軟に加えていることがみてとれます。

ここでは北タイでみられるハラール食品を紹介しましょう。

この右の写真（図2右）は雲南系ムスリムのハラール料理店です。緑の布をたてかけて白字の英語でHalal Foodと書いているのが見えます。雲南系ムスリムが、自分たちが作ってきた郷土料理などを商品として売るときに、こういうかたちで看板を立てて売っています。

そこで売っている料理を紹介します。これはカオソーイです（図2左）。北タイでは名物になっているカオソーイですけども、麺は小麦粉に卵を入れていて、ココナッツを加えたスープとカレー風味がするラーメンです。中国には、牛肉麺というのがありますが、それが東南アジアで変化した形

図2左

図2右

で生み出された食文化の典型ともいえます。もともとムスリムの日常食がタイ的なものになって商品化されています。

これは牛干巴（ニューカンパ）と言いますが（図3）、雲南でムスリムたちがよく食べる大事なもので、郷土食です。牛に塩や香辛料をもみこんで干したもので、雲南ではムスリムが冬の季節に作る保存食の一種です。交易者であったムスリムたちは外でご飯を食べるときにこの乾燥した肉、ビーフジャーキーみたいなものがあることによって保存食として非常に役立ったと言われていまして、この技術をそのままタイに持って来て、普段の日常生活のハラールフード店でもこれを置いて売っています。ラーメンの上に切って載せたり、炒め物に使います。ハラールフード店にこれを置いているということは、その店が中国系ムスリムということがすぐにわかります。

図3

これは油香（ヨウシャン）（図4）と言います。小麦粉で作った揚げ物で、クッキーのような味がします。しかし、これは単なるお菓子以上の価値があり、やはり雲南系ムスリムたちの伝統食です。北タイの雲南系ムスリムが私に食べさせてくれたのは、ムスリムにとって正月にあたる断食明けの祭りのときです。

図4

北タイの雲南系ムスリムは断食の1ヶ月が終わると、約3日間にかけて、家族や親族、友人訪問をご近所、市内の雲南系ムスリム、さらに郊外の雲南系ムスリムの家を順番に訪問し、新年の挨拶をします。その時に、接客用の菓子として雲南系ムスリムがもてなしをするのに使う儀礼用の伝統食品なのです。

3-2. 共食儀礼におけるハラールの実践

このように雲南系ムスリムのハラール食品は、イスラームの暦や人生儀礼と結びついてきました。とくに、雲南系ムスリムのコミュニティでは、請客（チンケー）、做客（ツォエケー）という、人を食事でもてなすこと、招待されたのを断らずに礼をつくして訪問することが、社会生活を円滑にするうえで大事にされてきました。漢民族が円卓を囲んで人間関係を潤滑にするという話しを聞きますが、中国系のムスリムでも、円卓に客を招いて共食を大事にする習慣がみられます。

タイという異国に生きる雲南系ムスリムはフェーストゥフェースの共食を通じて、信仰共同体と人間関係の繋がりを守ってきた点に特色があります。それはイスラームの暦や人生儀礼とむすびついて家庭レベルからモスクまでさまざまな場面でみられます。家庭レベルでは牛肉麺（巴巴絲（パパスー））断食明けの祭りの初日の朝に食べられます（図5）。日本でいう新年ですが、彼らは雑煮ではなく牛年麺をたべ、この写真にあるように家族のみならず、親戚も集まっています。共食儀礼がに顕著にみられるのはモスクです。雲南系ムスリムのモスクでは宗教儀礼や結婚、葬式などの人生儀礼がさかんにおこなわれていますが、その中で共食儀礼としてさまざまなハラール食品がふるわれます。写真（図6）は、マウリドとよばれる預言者の生誕祭の共食風景です。しかも彼らの伝統食と多文化が絶妙に織り交ざっていまして、食のなかに多文化状

図5

況下にあるムスリムコミュニティの姿が如実に反映されているのです。移民ならではのハイブリディティです。

例えば、雲南系ムスリムのイスラーム実践である共食儀礼の場面として、断食（ラマダーン）明けの祭りの共食場面のメニューをみてみましょう。写真（図7）はその時に出されていた料理です。興味深いのは雲南系ムスリムの料理のほかに、南アジア系の料理やタイ料理も混ぜられていることです。食卓にはほぼ必ずと言っていいほど、ジャガイモとショウガ入りのカレーが出されます。これは中華料理ではなく、南アジア系のムスリムの料理がオリジナルで、「ケーン・ヌァ」と呼ばれていますが、おなじ「ケーン・ヌァ」でもタイ料理の食材とはまた違っています。タイ料理としては、春雨炒め「パットウンセン」が作られています。通常、儀礼用の食卓には中華料理が並ぶ中に、毎回南アジア系のカレーがきっちり定番として組み込まれているのです。分かりやすく言えば、日本のおせち料理に、外国風の一品が入った上で、それが定型化してしまっているようなものです。中国の農村ではあり得ないことが、中国を離れてタイの都市に来た移住してきた雲南系ムスリムの食文化に変化をもたらしたのです。

図6

図7

4. 喜捨と共食儀礼－断食月の多文化状況

4-1. 大切にされる喜捨の精神

このようにモスクは信徒と信徒の水平的なつながりの礎となり、ハラール食品でもてなされるさまざまな儀礼があることがわかります。しかし、注目したいのは、共食儀礼の文化要素の追加や変容を意味しているだけではないことです。共食儀礼を支える人々の信仰的側面にも着眼していくことで、人々の宗教的実践の奥行きが理解できるのです。

イスラーム社会では善行を奨励し、そのなかでも喜捨の精神はとくに大事にされています。喜捨には自発的な喜捨（サダカ）とイスラーム法の義務に定められた喜捨（ザカート）があります。例えば私が調査していたバーン・ホー・モスクの看板（図8）には、クルアーン9章18節の一部「神の諸モスクを世話するのは、次のような者に限られる。すなわち、神と終末の日を信じる者〔にして、礼拝の務めを果たし、定めの喜捨を行い、神以外の者を恐れぬ者〕である。」が刻まれています。イスラームにおいて喜捨を通じて善行を積み重ねていくことが大事であることや、その精神が雲南系ムスリムコミュニティのなかに流れていることがはっきりと分かります。

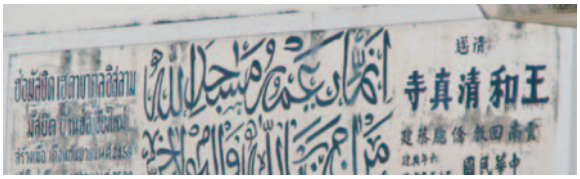


図8

喜捨の施しは、弱者への金品による救済のみならず、他人を助けるための時間や尽力、親切や慰めの言葉をかける、知人への葬儀の参列などさまざまな慈善行為を含んでいます。大事な点は喜捨を通じて善行を組み、天国に行くといった個人レベルにとどまらず、相互扶助が自発的に行われているともいえるのです。それは、これまでお話してきた食事を施すという宗教実践にも通じています。

4-2. 断食月の喜捨と民族

雲南系ムスリム社会で喜捨がとくに奨励されるのは、断食月です。断食は、アラビア語ではラマダーンと言いますが、中国語では斋月（ツァイユエ）、断食をするこ

とを、巴斎（パツァイ）と言います。イスラーム暦では断食月は第９番目の月です。この断食月にはイスラームの規範に従い、夜が明けた早朝と日が暮れた夕方の２回の食事が許されています。日が暮れ断食があけると、夕方の食事が始まります。雲南系ムスリムのモスクでは断食月の共食は、１ヶ月間、モスクでおこなわれます。日没後、すなわち断食があけた夕方以後、雲南系ムスリムたちは、夕食をモスクで食べるのです。断食月は１ヶ月なので30回、雲南系ムスリムは同じテーブルを囲んで共食します（図９）。

図９

このコミュニティにおいて特徴的なのは、１回ごとの夕食には、雲南系ムスリムの代表者１名が主催者になる点です。モスクでは、断食用の夕食の主催者を募集します。このように熱心に宗教儀礼を支える最大の理由は、イスラームでは喜捨は神が規定した定めであり、善行を増やすことが来世における天国に行くことにつながると信じているからです。とくに、断食月はもっとも神聖な月で、このときに主催者になると、大きな善行になり、その報いは通常よりも格段と多くなると信じています。このような喜捨による来世への信仰が、宗教活動への参加を活発化しています。

その結果、雲南系ムスリム同士の相互交流は断食月で活発化しますが、興味深いのはその宗教実践には、他者に対しても開かれた開放性をもっている点です。断食月の１ヶ月には人の移動がみられるのです。とくに、貧しいミャンマー系のムスリムや普段は雲南系ムスリムのモスクには来ない南アジア系ムスリムの人たちが、雲南系ムスリムが断食月に作る豪華な料理を食べにモスクに集まります（図10）。中には、国境周辺から４、５日かけて雲南系ムスリムのモスクでの食事のために家族単位で移動してきたミャンマー系ムスリムもいました。貧しいミャンマーの仏教徒はこの時期かぎりで、偽装してムスリムになり、30日間の断食月の夕食を雲南系ムスリムのモスクで食べるのです。

図10

とりわけ、断食明けの祭りの朝には、モスクには乞食となって門のそばで喜捨を待機している人でいっぱいです。写真（図11）からみて分かりますが、彼らはすべて雲南系ムスリム以外のミャンマー系や南アジア系の信徒なのです。偽装してムスリムになった人も含まれていることでしょう。このように喜捨の精神によって、断食月と断食明けの祭りには、イスラームの教義に沿った上で、雲南系ムスリムと非雲南系ムスリムが食べ物を通して交流し、他者に開かれた儀礼場面を創出して

図11

いるのです。

ここからまとめに入ります。ハラール食品を食べるというのは身体をもってイスラームの信仰を実践し、究極的には来世での救済につながるのですが、中国人にとっては共食をすること、人をもてなすことは文化習慣としても大事にしてきました。そのおもてなしの精神がイスラームの信仰と作用して、断食月という聖なる時間には、自己の救済のみならず、他者に開かれた場として一年に一ヶ月間盛大に行われているのです。雲南系ムスリムの食文化は異文化が混交しているだけではありません。そこには雲南系ムスリムがイスラームの信仰に沿った「（正）義」の実践を通して、自己の救済と他者に開かれた多様な相互扶助の場として共食の場を読み替えていることが分かりました。民族間の垣根をこえ、正義を食べることで民族を超えた垣根とフェーストゥフェースの関係が生まれているのです。このように多民族状況下における「正義」は、食べるという身体的、宗教的観点からみた場合には、その実践は個々の魂の救済のみならず、開かれた民族のつながりを生み出していると言えるでしょう。